

## 1 川崎正蔵(以下正蔵)の起業挑戦スピリット

1.1 筆者は長年川崎重工の造船部門に籍を置いていたので、会社創業者川崎正蔵、初代社長松方幸次郎の活躍とその周辺について調査、発表する機会があつた。今春には、川崎造船所創業時における「神戸造船所・第1ドックの建造とその難工事」について船舶海洋工学会で発表した。

この第1ドックは川崎神戸造船所の開設 M.19(1886)の10年後に着工し、M.29(1896)~M.35(1902)の実に満6年間~M.35(1902)の難工事を要して漸く完成させた石造りのLxBxD=130x15.7x5.5mの当時としては本格的なドライ・ドックで、勿論神戸港における最初のものであつた。着工前4年間の調査期間を併せると、実に10年を要した大工事であつた。(三菱神戸造船所が神戸港西端近くに開設されるのは、このドック完成約3年後 M.38(1905)の事である)

1.2 着工は日清戦争 M.27-28(1894-95)の終戦の翌年、完成は日露戦争 M.37-38(1904-05)の開戦2年前と言う時期にあたり、神戸開港も既に約30年を経ており、入港船舶が大幅に増加している状況であつた。川崎造船所は兵庫官营造船所を引き継ぎ発展するわけだが、今後、大型船建造を目指す造船所として発展する為には、近代的なドライ・ドックの建設は必須要件である事から、何度か調査が行われてきたが、湊川河口に位置するこの地の軟弱地盤ではそれは不可能というのが結論であつた。

川崎正蔵は、新進の土木技師・山崎鉉次郎を工事責任者に迎え、この軟弱地盤に本格ドック建設に挑戦する。詳細は1)に譲るとして、仕切り堰堤建設に1年半を要して完成すると、渠底が水圧で盛り上がり、ドライアップのままでは工事不可能となり、すべてを水中作業とする事を余儀なくされる。セメント工事の為にはドック内に湧き上がった海水8万トン清水にすることが必要で、神戸市水道局に特別要請してすべて水道水で置換。その量31万トン。等難工事がつづく。さしもの山崎鉉次郎も予想外の難工事、予想外の出費に責任を取って辞表を出す、「川崎の全財産を投じてでもこのドックは完成させる」とする川崎正蔵の挑戦、気迫に山崎鉉次郎は感激、その完成を誓ったという。筆者もこのような難工事への挑戦と併せて、近代的な造船所を作り上げようとする川崎正蔵の造船業起業にかける挑戦の態度を思い、感銘を受けた。1)は、その工事関連をまとめたものだが、更にその挑戦のルーツはどこから来るのか、を調べようとしたのが本稿である。

1.3 その為には、浜崎太平次の事に触れなければならない。川崎正蔵は「スライト 10」にも示す様に15歳から26才まで浜崎太平次の「山木や」で航海・造船・貿易などについて修行している。この時期の刷り込みはおおきい。又、薩摩藩当主・その他エリートとの交友、更に斉彬の建設した鹿児島造船所とそこで建造された我が国最初に属する西洋型船舶の実態を目の当たりにしている事、太平次が薩摩藩と一体になっておこなった琉球貿易と抜け荷等から受けた影響を抜きには語れない。

## 2.浜崎太平次の顕彰碑文

2.1 此処で取り上げる浜崎太平次は浜崎家8代の太平次である。鹿児島出身の川重OBでも、その名を知らない人は多い。「スライト 1~3」その他で紹介するように実に魅力ある海の男であり、残念ながら明治維新を前にして大阪に客死する。しかも残念ながらその後の浜崎家は没落(スライト 22)、断絶する。神戸で川崎家に寄寓の時代も続いている。神戸布引、中山手の川崎家地所は浜崎家から受け継いだものである。両家には太い絆のつながりがある。太平次顕彰碑除幕式には川崎重工から役員が出席、200万円を献じ

た、という(顕彰会)。

一読すれば、直ちにほぼその全貌を思い描くことが出来る太平次の顕彰碑文をつぎに引用する。

### 濱崎太平次正房紀功碑文 前譯文

我薩摩藩、薩・隅・日三州ヲ統治シ、琉球ヲ附庸トス。鬱トシテ西海ノ雄鎮タリ。明治中興、英豪輩出シ、顯要ニ列シ、功名ヲ垂ル、モノ尠カラズ。而シテ世未ダ濱崎太平次君ノ我藩ノ財用ニ大功アルヲ知ラザルナリ。君、諱ハ、正房其先隅州國分八幡宮ノ神職タリ、後徒リテ薩ノ指宿邑ニ居ル。海運ヲ以テ業トシ、家産暫ク殖エ、遂ニ薩南ノ豪賈トナル。五世太左衛門、始メテ其名ヲ日本長者鑑ニ列ス。實ニ君ノ祖父ナリ。六世以下、太平次ヲ以テ通稱トス。君ハ其八世タリ。生レテ明敏、膽畧アリ。早ク父ヲ失ヒ家業衰微ス。君、發憤忍苦、終ニ奮業ヲ復ス、又、密カニ外商ト貿易ス。此時ニ當リ、我藩財用困乏シ、藩老調所廣郷、銳意回復ヲ圖ル。君、旨ヲ承ケテ運輸貿易ニ從事シ、北ハ蝦夷ヲ窮メ、南ハ琉球ニ抵ル。或ハ遠廣東及ビ呂宋ニ航スト。功ヲ以テ士籍ニ列セラル。齊彬公封ヲ襲キ、深ク宇内ノ形勢ヲ察シ、先ヅ港ヲ琉球ニ開カント欲ス。君夙ニ公ノ知遇ヲ蒙リ、措畫スル所多シ。本店ヲ鹿児島ニ構ヘ、支店ヲ大阪・長崎・松前等ニ設ク。富、既ニ鉅萬ヲ累ネ、而カモ志恆ニ報效ニ在リ。文久三年六月十五日、病ヲ以テ大阪ノ別邸ニ没ス。享年五十。

予嘗テコレヲ海東松方公ニ聞ク、慶應三年ノ秋、我藩、吏ヲ長崎ニ遣ハシテ軍艦ヲ外商ニ購ハシム。適一艦アリ、精堅比無シ。價、十六萬兩ニシテ即時其半ヲ要ス。而ルニ藩吏齎ス所三萬八千兩ニ過ギズ。乃チ之ヲ濱崎氏ノ支店に謀ル。支店立ロニ之ヲ辨ズ。因テ直ニ回航ス。謂ハユル所九十餘人、信ヲ内外ニ取ル。其能ク君國ノ急ニ應ジ、巨財ヲ投ジテ報效ノ義ヲ全ウスルモノ、職ヲ君ガ生前ノ努力經營ニ由ル。君又後進ヲ指導スルニ方アリ。其撫育ヲ受ケ、海運業ヲ以テ顯ハル、者甚ダ多シ、川崎正藏ノゴトキモ其一ナリ。君、經濟ノ才ヲ抱キ、幕末多難ノ日ニ際シ、率先シテ航海通商ノ業ヲ開キ、以テ藩用ニ資ス。其功洵ニ偉ナリ。而シテ九世太平次ヲ蚤ウシテ子無シ。君ノ姪某入リテ十世太平次ト為ル。年尚少ク業漸ク衰ヘ、産遂ニ落ツ、君ノ事跡亦將ニ湮滅ニ歸セントス。是ニ於テ郷人胥謀リテ、濱崎太平次顯頌會ヲ興シ、碑ヲ湊ニ建テ以テ其功ヲ表ハサント欲ス。宮里源之丞會長タリ、辨理允ニカム。頃口文ヲ予ニ請フ。予モ亦夙ニ君ノ功業ノ埋没シテ傳ハラザルヲ惜ム。因リテ其梗概ヲ叙シ、之ヲ石ニ勤セシム。湊ハ指宿邑ニ屬ス、實ニ君ノ生地ナリ。鹿兒嶋灣ニ瀕シ、環ラスニ江山ノ勝ヲ以テシ、風帆浪舶、日夜往來ス。灣ヲ出ヅレバ則チ一望萬里、煙波浩渺トシテ遠ク南洋ニ連ル。嗚呼此レ君ガ雲濤ヲ蹴ツテ功業ヲ樹ツルノ處ニアラザルカ。庶ニ幾クハ此ノ碑ヲ觀ルモノ、觀感與起スル所ランコトヲ。

昭和七年六月十五日

正三位勲二等侯爵 大久保利武 撰

(63)

川崎正藏が、濱崎太平次の指導を受けて育てられたという件は、本稿の首題でもあるので注目に値

する。この碑文を書いたのは、太平次は勿論、川崎正蔵とも交流浅からぬ維新の3傑といわれた大久保利通の3男の大久保利武。彼は太平次他界後の慶応元年(1865)生まれだが、内務官僚貴族院議員、一高・イェール大卒更に独逸ハ大・ハイデルベルグ大、ベルリン大に学ぶ。商務局長、大阪府知事。兄利和の養子となり家督相続、侯爵。日本赤十字社理事、昭和18(1943)没。太平次との繋がりとして最適の人物だったのであろう。碑文は、要を得た簡潔な漢文調でエピソードも盛り込み、太平次の全体像を知る上で興味深い。

また、太平次が薩摩藩の金子用立てに対しては、即断して躊躇なくこれに応じている様が髣髴とされる。これは太平次が薩摩藩の置かれた財政・開明派的藩政を良く認識していた事に加え、「彼の海運・貿易ビジネスが「抜け荷」と密接に一体化」しており、藩中枢に積極的に与する事こそがビジネスを安定的に続ける上で必要だった理由も大きいと思われる。

### 3.軍艦購入費

\*「おかしあげ」は藩から、或いは要路の藩士から金子の要請、相談に対する用立て(事実上の献金)。

#### 3.1 安政6(1859).10ー「桜田門外の変」使用の「エンフィールド銃購入」一大久保利通の依頼

1).直接太平次宅を訪れた大久保利通から「エンフィールド銃をできたら10丁、2丁でも3丁でもよか、これで日本がかわる」と依頼された。太平次は早速琉球に向かい、琉球の代表的貿易商に成長した旧知の某に依頼、「2丁なら何とかなる」。翌朝「エンフィールド銃2丁、長崎のグラバー商会でわたすこつなつた。やはい2ヶ月かかる。グラバーに会っちくれ」として商談成立。・・・

2). 伊井大老、桜田門外にて暗殺さるー安政7年(1860)3月3日——3月18日万延と改元

「この時使用された狙撃銃は3.1.1)の薩摩藩調達のエンフィールド銃である」とするのが「豪商伝」の南原幹雄氏である。桜田門外約600m地点、水戸藩の警護60人、18名の水戸と薩摩脱藩浪士により、僅か3分という短い時間に事件は終わっている。一発の銃声合図で切りかかり、刀で仕留めたともいわれるが、剣の達人と言われた直弼が全く抵抗してない謎の多い事件とされている。直弼使用の座布団の血痕は刀傷による大出血ではなく「致命傷は太ももから腰にかけての貫通銃創」との彦根藩医・岡島玄達による記録がのこっている。狙撃したのは森五六朗として、使用?の拳銃だとして靖国神社「遊就館」に保存され、戦後GHQに押収されアメリカに、最近日本で発見とか言われるが、謎が多い。当時の「エンフィールド銃」は1853年にイギリス軍の制式小銃に採用された最新の先込め式ライフル銃で有効射程900m(wikipedia)とされるが、次々に改良されていったので、現物がどの程度の性能かははっきりしない。NHKの歴史秘話ヒストリアでは拳銃について取り上げて、エンフィールド銃/薩摩藩経由云々には触れていない。歴史の謎である。

#### 3.2 生麦事件賠償金—2万両を藩のミネヘル銃購入に伴い献金<sup>3)</sup>

文久2年(1862)9.14 横浜市鶴見区生麦付近で起きた島津久光(当時の藩主茂久の父)の行列に乱入した騎馬のイギリス人を供回りの藩士が殺傷(死亡1、重傷2)。イギリスは幕府に対し賠償金10万ポンド、薩摩藩には2万5千ポンド(6万330両)を要求した。幕府内では紛糾、曲折を経たのち支払(直後に老中罷免)、一方薩摩藩は強硬に支払拒否。所謂・薩英戦争が起き鹿児島市の市街の被害、英国軍艦の被害も多く艦隊は去り戦闘は終息した。薩摩藩は幕府より借用の上、6万330両を支払ったとされる(wikipedia)。この事件に備え、大久保利通(西郷隆盛の説2))からの依頼で、ミネヘル銃を外国から購入の為太平次は2万両を献金している。太平次が筆頭で、以下1万両・田辺泰蔵、8千両4名等、34





④)。

その関係図を前頁にしめす。

①11代・徳川家斉(在位 1773~1841)、正室島津寔子(しまづただこ、広大院)・島津重豪の子、近衛経熙(このえつねひろ)の養女となった後輿入れ。

②13代・徳川家定(いえさだ、1824-1858)、継室：島津敬子(篤姫・天璋院)、敬子の実父：島津今和泉家の島津忠剛、敬子の義父：島津藩主の島津斉彬及び摂家の近衛忠熙

#### 4.2 島津重豪(しげひで、薩摩藩 8 代藩主)の権力増大

①の結婚により、島津重豪は前代未聞の「將軍の舅である外様大名」となり、後に「高輪下馬將軍」といわれる権勢の基となった。將軍家に輿入れした広大院の実母は、④の慈照院ではなく重豪の側室・市田氏だが薩摩藩大阪屋敷の足輕から下級武士階級に昇進したとの異説もあるが、この結婚により自ら重豪の正室同様に振る舞い、この「市田一族の薩摩藩政私物化は後の近思録崩れ」の原因の一つとなる弊害をもたらしたとされる。広大院(御台所)が男子・敦之助を出生するのは 2 代將軍秀忠正室お江与の方以来という慶事であったが、残念ながら既にその 3 年前に側室が生んだ家慶が將軍世子となっていたのは残念であった。然し、側室の子と言えどもすべては家斉の子供は正室の子とされ、その権勢は揺るぎないものとなった。

#### 4.3 薩摩藩抜け荷不問の背景——

③、④の將軍家よりの輿入れは、寧ろ將軍家からの要請によるもので、③では既に藩主継豊に男子が出生していたので、仮令今後男子が出生しても藩主にしないと誓約までしている。受け入れ側では、非常な物入りと付き合いの気苦労が大きな負担となった。財政不如意の薩摩藩は大いに困惑した。

然し、①の場合は反対に、重豪は薩摩藩の地位を高める為に、祖母浄岸院の遺言によるとして、幕府その他の反対を押し切っている。

結果的に、これらの將軍家との密接な婚姻関係により、お由羅騒動による薩摩藩の抜け荷に対する幕府処分が、不徹底なものとなったと考えられる。更に、薩摩藩世子・斉彬と幕閣首座・阿部正弘との間の密約にもよるとの説が有力である。

### 5.川崎正蔵 の項補足 「ｽﾗｲﾄﾞ 10」補足 2),3),12)

5.1 略伝——天保 8 年(1837)7 月鹿児島城下大黒町の商人、川崎利衛門の長男として出生。15 歳の時父を失い、海運貿易商・浜崎太平次に就職、琉球貿易船乗船、造船所業務も体験した<sup>2)</sup>。17 歳の時、同長崎店勤務、貿易商等の実務修行を積む。早くからその非凡な才能を認められた。27(or 26)歳で大阪に進出、回漕業を営む(浜崎支店兼務? <sup>12)</sup>。持ち船の遭難で失敗。M2(1869)薩摩藩士が設立の砂糖会社に勤める。以下略

5.2 非凡な才能と努力——①浜崎太平次の述懐。「その勉強熱心、尋常一様の店員にあらず、いずれひと旗あげるであろう。②徳久恒範の述懐「鹿児島より長崎に帰るべく、一商人の船に賃乗りせるに、余より先に商家育ちと思しき一少年の乗り合い客あり、船が鹿児島を出帆すると、少年は風呂敷包より福沢翁の著述にかかる「西洋事情」なる書を取り出して、一心不乱に読んでいる。それから今一冊の書籍を携帯せるを見たが、その書は英和辞書であった。……年齢と姓名を問えるに年は 17 で貿易業をなす川崎利衛門と答えた。……」。この徳久恒範は正蔵より 7 才年下、後に熊本県知事他を歴任した貴族院議員。12)によると、時期に少し徳久の記憶違いもあると指摘があるが、内容は間違いな

かろう。正に勉強熱心は突出していた様である。

## 6.造船業への参入動機と背景――

### 6.1 動機一次の①又は②が良く知られている。

①明治2年9月大阪⇒鹿児島、西洋型木造スクナー型に乗船した時、土佐沖で暴風雨に遭遇難破。

大櫓を切り倒し沈没をまぬかれ、「種子島の竹の浦」に漂着全員救助された。この時辞世の句を残す。海難からの生還は、西洋型船舶だからこそ最悪事態を避けられたという確信を得た、という。

「和船建造禁止建白」を数回の大蔵省に提出したはこの事件の体験によると思われる。スライド10参照

②明治9年12月29日、鹿児島⇒長崎、三那丸約500Tに乗船の際、天草灘で暴風雨に遭遇、牛深港入り口で座礁、乗員は船を放棄して上陸。修理不能に。川崎は船奉行に頼み船体・機関の図面の説明を技師から受けてつぶさに研究。赦しを得て技師・人足の先頭に立ち修理に成功。船奉行より100円の褒賞金を得る。

6.2 背景―上記事件は直接の動機として間違いは無かろうが、私見では、①、②を起業の動機とするのは、あまりに単純すぎて正しくないと思う。これまで述べたように、鹿児島における太平次の下で、彼の当時国内最大ともいわれる造船所における実地体験、琉球航海、等から得られた船舶の偉大な効用とそれが求められる国内外情勢が刷りまれているのが大きいと思う。更に斉彬の鹿児島造船所、及びそこで建造船を目の当たりにしている筈、又、長崎在勤時の内外の関係者との交流・知見に、正蔵の起業願望は次第に固まっていったのではないかと考えるのが妥当であろう。

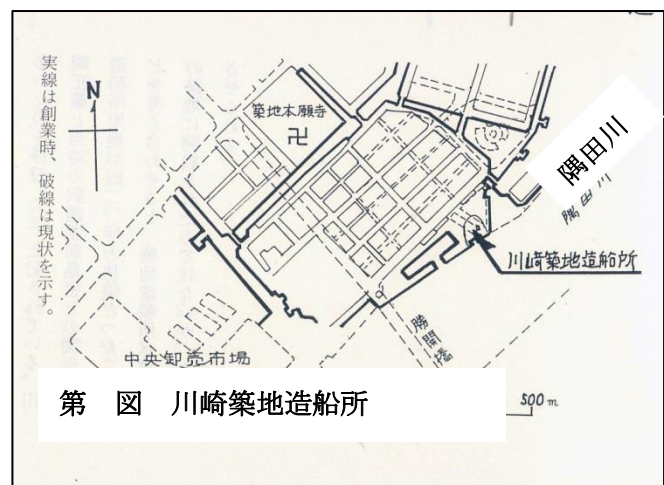
15名の薩摩の英国留学生の引率役で渡英後先に帰国した五代友厚。川崎は家族ぐるみの親しい付き合いであった<sup>12)</sup>が、当時英国は、世界の造船の70%近くを建造していた造船大国であったことから、五代から生々しい情報などを入手していたに違いない。それは大きな刺激となったであろう。

## 7.川崎正蔵の仕事のやり方

川崎正蔵は明治11年

(1878)4月、東京築地南飯田町9番地の官有地約420坪(1,386㎡)を借り受け、川崎築地造船所を開設した。之が川崎重工の起源 7.1 築地造船所―川崎正蔵は明治11年

(1878)4月、東京築地南飯田町9番地の官有地約420坪(1,386㎡)を借り受け、川崎築地造船所を開設した。之が川崎重工の起源である。隅田川に面した面積400坪余りの当時としても小規模の造船所であったが、西洋式造船所ともなると問題が多かった。当時西洋型船の技術者は極めて少なく、人探しが容易でなかった。川崎は、旧幕府の主船技師で海軍大匠をしていた安部定保を月給200円で技師長に迎えること出来たが余りの高給に世間を驚嘆させた<sup>14)</sup>。今では月給約1千万という



ことか。又、当時は未だ和船を喜ぶ風潮が根強く、西洋型船の建造は国賊的行為と叫ぶ国粋主義者も少なくなく、注文獲得、啓蒙と演説会、商工会議所メンバーとしての宣伝に努めたと言う。

第1船・北海丸の進水式・明治11年7月15日には官界の名士千数百人を招待。式・祝宴・広告費用は船価を上回ったと言う。その後明治12.7.5の進水式出席者名でも、大隈重信(大蔵卿)、川村純義(海軍卿)、西郷従道(陸軍卿)、大島新(工学頭)、渋沢栄一、岩崎弥太郎、大倉喜八郎、等などの名士の名前がずらつと並んでいるのには驚かされる。

7.2 川崎神戸造船所——現在の神戸工場は官営兵庫製作所の払い下げをうけて、発展させたものであるが、川崎正蔵の本当の狙いは、ここ神戸にあったに違いない。先ず、東京の中心築地に造船所を作って存在と実力を獲得。本命である神戸にすぐ出張所設置。続いて、官営兵庫製作所の湊川を挟んだ反対側(西側)の西出町に川崎兵庫造船所を建設。払い下げの地盤堅めをめぐらせている用意周到さがうかがえる。ここでの払い下げでは平野富二\*との競願もあってすぐには決まらない一方で、当時川崎正蔵の持ち船、竜王丸、龍田丸が沈没、又身うちでは3男がアメリカで死亡、続いて次男で嫡子も急死と極めて苦しいときであった。一度は造船業を引退する決意をしたほどだといわれる。漸く政府の兵庫造船所が賃下げられるという井上馨の使者連絡を病床で受け流涕歓喜したという<sup>12)</sup>。

\*平野富二(1846~92)は明治9年(1876)に石川島の民間事業として造船所を創設している。元々、幕府の長崎製鉄所見習いから明治2年(1869)に長崎製鉄所兼小菅造船所長となり後の三菱造船所の基礎を築き明治4年(1871)に辞して東京進出したもので、当時、造船所経営者としての評価は川崎正蔵を大きく凌駕していた。

政府は、「川崎が平野より先願」として正蔵の払い下げを決めたとされている。

## 8. 結び

築地造船所の開設に続いて、この官営兵庫製作所の払い下げによって、今日の川崎重工の礎は決まったと言える。二つの払い下げ経緯についての幾つかのドラマもあるがここでは触れないが、それは川崎正蔵の全人生と人格の結晶した結果であって、今まで述べてきた彼の能力・努力、薩摩・政府要路・その他官・財界の人脈と、積み重ねられた実績によるものであろう。

浜崎商店は、残念ながら明治新時代に活躍することなく没落に見舞われた、幕末の薩摩を中心に大きく羽ばたいた浜崎太平次の薫陶の成果と、その進取、果敢、開明等の精神は、川崎正蔵に受け継がれる事になったと言えると思う。

いずれにしても、この様にして払い下げを克ちえた川崎正蔵としては、いかなる困難があろうとこの造船所経営を成功させねばならない立場であるし、彼自身も改めて決意したに違いない。……このように見る時、頭書の筆者の疑問である川崎正蔵の造船にかかる強い挑戦スピリットの理由が理解できたように思う。おわり

浜崎太平次 (1814 指宿)	1853	1863	大阪にて客死				1912 大正 1
文化 11	嘉永 6	文久 3					没 ↓
川崎正蔵 (1837 鹿児島)			1878	1881	1886	1896	
天保 8	浜崎商店		M.11	M.14	M.19	M.29	
	勤務		築地	兵庫	川崎	(株)	

造船所      ”      ”      川崎  
造船所  
以上